何故ばれる

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

何故ばれる

【Nコード】

N1386I

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

狐と川獺と狸は人の街にそれはそれは美味しいものがあると聞きました。それで人間に化けていざその美味しいものを食べに行きました。日本の童話です。

第一章

何故ばれる

川のせせらぎが聞こえてくる山の中。今ここに狐と狸と川獺が三人向かい合って座っていました。そうしてあれこれと何やら話をしています。

「何じゃ、最近そんな店ができたのか」
「そうらしいぞ」

狸に対して狐が話をしています。今彼等は川辺の大きな白い石の上に座ってそのうえで捕まえた川魚を生のまま食べながら話をしています。

「人間の店でのう。えらく美味しいものを売っているらしいのじゃ」
「ふむ。美味しいものか」
狸はそれを聞いてその丸い目をさらに丸くさせました。

「というと揚げより美味しいのかのう」
「揚げはわしの好物じゃぞ」
揚げと聞いて狐はすぐに狸に突っ込みを入れました。

「御主も好きなのか？」
「わしも揚げは好きじゃ」
狸もそれは隠しませんでした。

「同じようにのう」
「ふむ。そうじゃったか」
狐は狸のその言葉を聞いて腕を組んで考える顔になりました。

「それははじめて知ったのう」
「知ってもらえれば嬉しいことじゃ。とにかくじゃ」
「うむ」

「その店はどんな店なのじゃ？」
狸はその身体を前に突き出して狐に尋ねました。
「何を売っておるのじゃ？それで」

「何でも甘いものらしいぞ」

狐はこう狸に答えました。

「甘い。砂糖をたっぷり使った菓子だそうじゃ」

「ほう、砂糖をたっぷりとか」

それを聞いてあらためて目を輝かせさせた狸でした。まるでじめて素晴らしいお話を聞いた時のように。そんな目になったのでした。

「それは美味そうじゃな」

「そうじゃろう。実はわしも食べたいと思っておるのじゃ」

「そうじゃな。では早速その店に行こう」

ここで川獺が口を開いて二匹に言ってきました。彼はこれまでずっとお魚を食べることに専念していたのですがはじめて口を開いたのです。

「その人間の店にのう」

「人間の店にか」

「そうじゃ。美味いのじゃろう?」

川獺は持っている魚を全部食べたうえで狐に尋ねます。

「その菓子は。そうなのじゃろう?」

「それはそうらしいのう」

狐は川獺に対しても答えました。

「ほっぺたが落ちそうだそうじゃ」

「では行って食うべきじゃ」

川獺はまた言いました。

「美味しいものは食わんと何にもならんものじゃ」

「しかしじゃ」

今度は狸が言ってきました。

「それを食うのはいいのじゃが」

「何じゃ?」

「問題は食えるかどうかじゃ」

彼が言うのはこのことでした。

「食えるのかじゃ。その菓子が」

「何か問題があるのか？」

「人間がやっている店じゃぞ」

狸はそのお店は人間がやっているということを川獺に告げました。
「人間がじゃ。わし等が行ったら相手にせんどころか追っ払われてしまっぞ」

「その通りじゃ」

狸の今の言葉に狐も頷きました。

「そんなところに行っても食える筈がないぞ。ましてや人間の店になると銭が必要じゃ」

「わし等銭なぞ持つておらんぞ」

また狸が言います。

「それなのにどうするんじゃ」

「そんな時にこそ術があるのではないか」

けれど川獺は得意そうな顔になって二匹に告げるのです。

「そんな時の為にのう」

「?というとじゃ」

「化けるのか」

「そうじゃ」

川獺は腕を組んでその得意そうな顔のまま再び彼等に告げました。

「人間に化けてじゃ。それで行くのじゃよ」

「成程。人間ならばのう」

「問題はないな」

狸も狐も川獺の言葉を聞いて頷きました。まさにその通りです。

第二章

「では銭はじゃ」

「いつも人間を化かすように木の葉を変えてじゃな」

「そうじゃ。それでどうじゃ？」

「うむ。ならばそれで行こう」

「それがいい」

狸も狐もここで合点して言いました。

「それでは早速」

「化けて。行くとするか」

「そうしようぞ」

三匹は思い立つとすぐに山を下りました。そうして人間に化けて市に出ました。市は人間達でごったがえしてお店も左右に一杯並んでいます。

「また随分と賑やかじゃのう」

「そうじゃのう」

人間に化けている三匹はその市を見回しながら話をしています。市を回って品を見ている人達も商いをしている人達も活気に満ちていてとても明るい顔をしています。そうした顔も見てさらに機嫌をよくさせています。

「それに美味そうなものも一杯じゃな」

「おお、いい魚じゃ」

川獺は魚を売っている店を見て楽しそうな声をあげました。

「あれは美味そうじゃな」

「あそこの野菜もいいぞ」

「ほう、揚げもあるぞ」

狸も狐もそれぞれ好物を見つけて言います。

「柿もあるではないか。程よい堅さじゃのう」

「揚げ方が絶品じゃ。あれを食うともうそれだけで」

「そうじゃのう。しかしじゃ」

けれどここで川獺が顔を引き締めなおして二匹に言つのでした。

「今は我慢しようぞ」

「おっと、そうじゃつたのう」

「その通りじゃ」

ここで狸も狐も我に返つて真面目な顔になるのでした。

「わし等はまず菓子を食わねばならん」

「その砂糖をたっぷり使つた菓子をじゃ」

「その通りじゃ。菓子じゃ」

川獺もこのお菓子のことを言つのでした。

「まずは目的を果たしてからじゃ。よいな」

「うむ、わかつた」

「それではじゃ」

二匹はその引き締めなおした顔で川獺の言葉に頷きました。

「その店に参ろうぞ」

「銭も作つたしのう」

「これじゃな」

川獺は懐から何枚かの銭を出したのでした。

「これで買おうぞ」

「うむ。しかしのう」

「人間とはわからんのう」

ここで狸も狐も首を捻つて言つのでした。

「どうして何かを手に入れるのに銭なぞ必要なのじゃ？」

「自分で取るかものともので交換すればよいじゃろうに」

「わしもそう思うのじゃがのう」

こう考えているのは狸と狐だけではありませんでした。川獺もでした。彼にとつても人間がどうしてもものを手に入れるのにそんな銭というものが必要なかわからなかつたのです。

それで彼等は首を傾げています。そんなことを話しながらそのお菓子を売っている店に向かいます。店に着くと何か頑固そうな親父

がいてその前に色々なお菓子を並べています。

「おお、ここじゃな」

「この店じゃな」

三匹はその出店を見て言いました。店は簡単な木造りです。

丁度今人間のお客がそのお菓子を買って店を後にするところでした。そのお客はもうお菓子を食べてとても嬉しそうな顔をしています。

三匹はその人間の顔を見て。それでまた言い合つのでした。

「本当に美味いようじゃな」

「そうじゃな」

「そうでなければあんな幸せそうな顔にはならんぞ」

このことを確信するのです。

「それではじゃ。買うか」

「うむ」

「そして食おうぞ、菓子をのう」

こうして三人はそのお菓子を買いに行きました。彼等はその頑固
そうな親父のところに来ました。ところがこの親父の傍にいたのは。

第三章

「うわ、何でこんなものがおるのじゃ」

「怖いのう」

「こつちに来るでないぞ」

それは一匹の犬でした。犬は親父の横で丸くなって寝ていますが彼等にとってはそれでも非常におっかない存在であるのです。

その犬を見て青くなりましたがそれでもお菓子は食べたいので。

三匹は親父の前に来ていうのでした。

「おう、親父」

「菓子をくれないか？」

「どれがいいんだ？」

親父はその頑固そうな顔で三匹に尋ねてきました。

「どの菓子がいいんだ？」

「どれかと言われてものう」

「どれがいいかのう」

「この黒いのはどうじゃ？」

川獺は小豆を潰して丸く作ったものを指差して他の二匹に言いまして。

「これなんか美味そうじゃぞ」

「そうじゃのう。これはよさそうじゃな」

「わしはこれがいいと思うのじゃが」

狸は川獺の言葉に頷き狐は別のものを指差しました。彼が指差したのは黄色い粉で化粧されたやはりとても丸いものでした。

「この黄色いのがのう」

「じゃあわしはこれかのう」

狸は白くて丸い少し焼いたものを指差すのでした。

「これがおさそうじゃな」

「おはぎと黄粉餅と饅頭か」

親父はここで三匹に対して言いました。

「それなんだな」

「何っ、これはおはぎというのか」

「黄粉餅というのか」

「饅頭か」

三匹は親父の言葉を聞いて驚いたようにそれぞれ言いました。

「ふむ。これがその砂糖とやらを使っておるのじゃな」

「この黄粉餅とやらが」

「饅頭がか」

「そうだが。それで買うのか？」

親父はまた三匹に尋ねてきたのでした。

「どうするんだ？それで」

「うむ、買つぞ」

「勿論じゃ」

「そのつもりじゃ」

三匹は一度に親父に答えました。

「だからじゃ。錢もあるし」

「うむ、あるぞ」

「買つぞ」

こう言つて今その錢を出したのですがここで犬が目を覚まして起き上がりました。三匹は犬が起きたのを見て驚いてしまいました。

「うわっ、起きたぞ」

「こつちに来るなよ」

「後生じゃぞ、おい」

この時三匹は確かに驚きました。それでついつい化けるのがおろそかになって一瞬ですが尻尾を出してしまいました。そしてそれは親父に見られてしまったのでした。

「むっ！？」

親父はそれを見て目を顰めさせましたがそれでも何も言いませんでした。ただそのうえで三匹をあらためて見たのでありました。

三匹はその錢を親父に差し出します。そのうえで彼に問いました。

「これでよいのじゃな」

「さて、それでは是非その菓子をな」

「もちろござ」

「待て」

ところがでした。親父はそのお菓子をすぐに渡そうとはしません。それどころか自分のすぐ後ろからあるものを出してきたのです。それは。

揚げと魚でした。しかもお蕎麦もあります。どれも食べ残しですが確かにその三つです。三つの食べ物を見た三匹は今度は術までもがおろそかになってしまいました。

「揚げ!?!」

「魚!?!」

「蕎麦か」

今度は尻尾は出しませんでした。が耳を出してしまいました。しかも錢が木の葉に戻ってしまいました。その木の葉を手元に持った親父は遂に言うのでした。

第四章

「木の葉で菓子を買うというのか？」

「何っ、木の葉じゃと!？」

「しまった」

「御馳走に気を取られてしまったわ」

三匹はここでしまった、と気付きました。けれどももうそれは手遅れでした。何とか耳は収めました。がそれでももう木の葉は銭には戻りません。今更戻したところでどうしようもないものでした。

「参ったのう、失敗したわ」

「どうする?それで」

「どうするもこうするもないじゃろ」

親父の前であれこれと言ひ合います。しかしもうどうにもなりません。何とか逃げようと思ますが親父の気配に圧されてその隙も見出せません。そして親父がここで言うのでした。

「何故ここに来たのだ？」

「ま、まあそれはのう」

「何でも砂糖を使った美味しい菓子があると聞いてじゃ」

「それで来たのじゃよ」

こう親父に正直に答えるのでした。

「じゃがわし等は山におつて銭なぞ持つておらんから」

「それで人に化けて銭も木の葉を変えて作つて」

「来たのじゃがのう」

「そういうことだったのか」

親父は三匹の言葉を聞いて頷きました。

「それでか」

「う、うむ」

「じゃがだれては仕方ない」

「去るとしよう」

諦めて帰ろうとします。その背中丸くなって肩は小さくなっています。けれど親父はそんな三匹に対して声をかけてきたのです。「待て」

「待て!？」

「待てとな」

「そうだ。待つのだ」

こう彼等に声をかけるのです。

「御主達がばれたのは犬と馳走のせいだな」

「そうじゃ」

「その通りじゃ」

親父はまた彼等に告げました。

「そうでなくともよく見れば雰囲気が人ではないがのう」

「うづむ、ばれるべくしてばれたのか」

「無念なことじゃ」

三匹は親父の言葉を聞いて残念な声を漏らしました。しかしもうばれてしまったので言ってもせんのないことはありません。それでも、であったのですが。

「それでは仕方ない」

「そうじゃな」

「残念じゃが」

そして次にはこう話す彼等でした。

「親父、邪魔したな」

「それではな」

「まあ待て」

ところがここで。親父は三匹に対して声をかけてきたのです。

「わしの菓子を食べたくて来たのだな」

「そうじゃ」

「その通りじゃ」

このことは素直に答える三匹でした。その為にわざわざ人間に化けて木の葉を銭に変えてそのうえで来たのです。このことは偽るこ

とはしませんでした。

「しかしばれてしまったからのう」

「仕方ないことじゃ」

「食いたいのなら食うがいい」

親父はその残念な顔の三匹に告げました。

「食いたいのならな」

「何っ!？」

「よいのか!？」

「それはまことか!？」

「わしは嘘は言わん」

親父は腕を組んで頑固そのものの顔で三匹に告げました。

「嘘はのう。言わんぞ」

「では本当に食ってよいのか」

「その菓子を」

「食うがいい。ただし次からはだ」

親父はこうも言い加えてきました。

「何か交換に持って来るのだぞ」

「それでいいのか」

「何か持って来れば」

「わしの菓子を食いたい者は誰でも来ていい」

これはこの親父の考えそのものでした。この人はこう考えてお菓子を作っているのです。

「だからだ。今回は特別にただでやろう」

「かたじけない」

「そうしてくれるのか」

「次からだだぞ。いいな」

「うむ、わかった」

「それではのう」

こうして三匹はばれましたでしたがそれでもそれぞれお菓子を食べることができたのでした。それから山から採れたものを親父にあ

げてそれと引き換えにお菓子を食べるようになりました。昔々のま
だ何もかもが素朴だった、そんな時のささやかなお話です。

何故ばれる 完

2009・8・19

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1386i/>

何故ばれる

2010年10月8日15時04分発行